

1 応急対策

ア ぶどう棚の修復

- ①棚が倒壊して樹体が倒伏したほ場では、なるべく早く棚と樹を起こす。なお、積雪が多く作業が困難な場合は、消雪剤を散布し融雪を促し、作業が可能となり次第早めに起こす作業を開始する。
- ②園の1辺から支柱を棚の親線や主枝など骨格枝に立てていき、棚面を持ち上げる。多くの人の協力を得るとスムーズに進むので、できるだけグループ作業とする（写真2、3）。
- ③Aマストでは、支柱が傾いている場合は棚を直すことにより逆に倒れる場合があるので、支えておくか先に倒しておく。
- ④樹体の修復など一連の作業が終了したら、棚の補修をきちんと行う。なお、棚の補修を本格的に行えなかった場合でも、ぶどうが生育する前には、主枝や棚の親線などを支える支柱を強化しておく。

表1 消雪剤の種類と融雪効果（2006年 北信普及センター、JA中野市）

試験区	10a当たり 施用量	各調査日の残雪量 cm(2/28~3/28)				
		散布時	7日後	14日後	22日後	28日後
炭の里	3.3袋	100	75	50	10	0
スーパー木炭E	3.3袋	100	73	45	10	0
蓼炭	3.3袋	100	73	45	10	0
蓼炭倍量	6.6袋	100	70	45	10	0
ラクトール	3.3袋	100	78	55	18	0
森からのめぐみ	3.3袋	100	75	50	15	0
無処理	—	100	90	80	50	25



写真2 棚倒伏後の応急作業



写真3 支柱立て後の状況

イ 樹体の修復

- ①主幹が裂けた場合は、棚を起こして支柱で下支えした後、ボルトやカスガイなどで止め、接合後に塗布剤で傷口を覆う（図1）。縄を幅広く巻き締めるなどして固定してもよい。また、その周囲の主枝など骨格枝には支柱を強化し、ボルトなどだけに力が集中しないようにする（図2）

- ②裂けた部分の固定ができれば、傷口から水が入らないようシルバー系のビニール類で覆う。
 シルバー系のビニールがない場合は、紙の肥料袋などを使い、温度が上がる資材は使用しない。
- ③融雪後に修復処理する際は、裂けた部分の乾燥防止のため、コモなどをかけておくことが望ましい。
- ④樹が大きく裂け、通導組織がわずかしかなかったりしていない場合は、被害が大きい側を切除し、傷口に塗布剤を処理する（図2）。空いた場所には健全樹の枝を移動してきたり、苗木植え付けなどにより生産量の回復を図る。

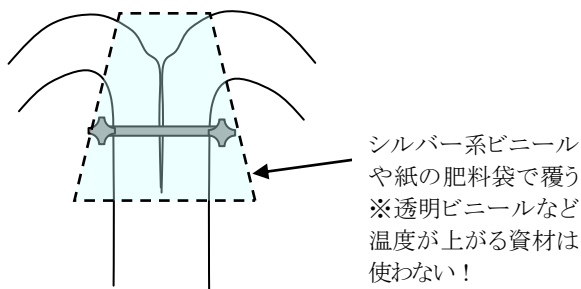


図1 通導組織がつながっている場合

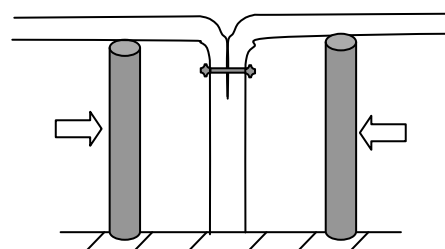


図2 裂傷修復部の周囲は支柱を強化

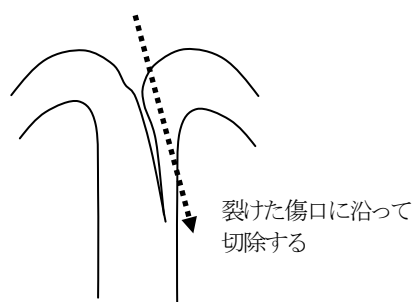


図3 通導組織がつながっていない場合

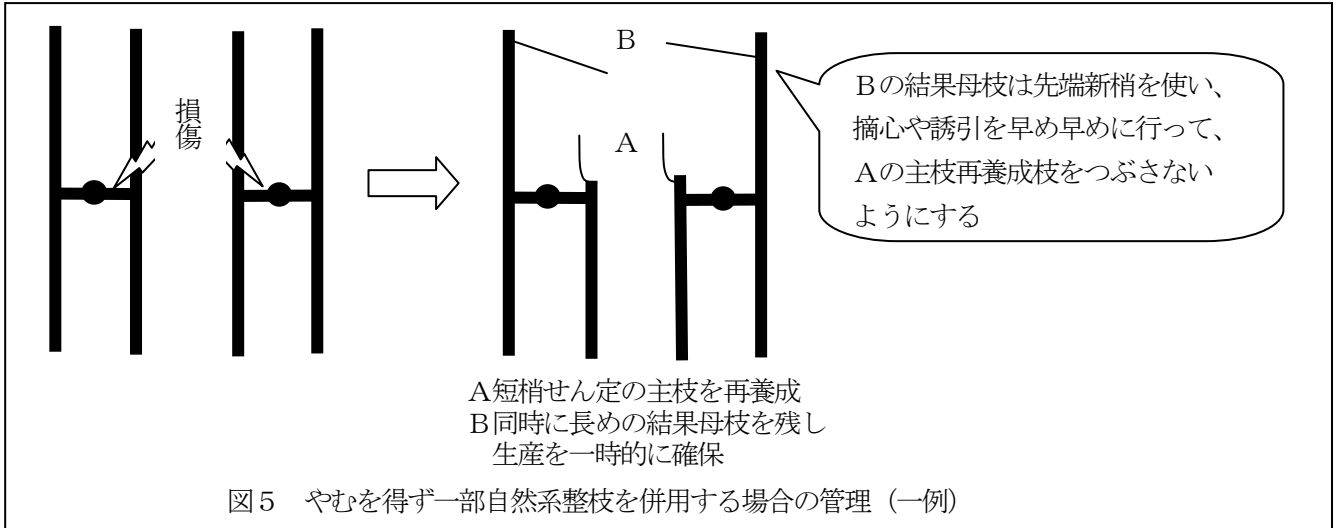
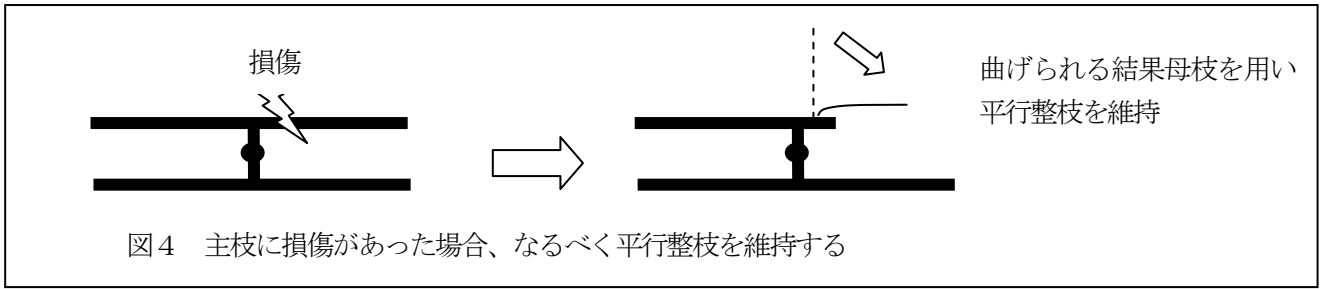
2 せん定上の留意事項

ア 有核巨峰

- ①残った樹体量を勘案し、有核果の生産が可能かを判断する。可能であれば結果枝量を充分量確保し、枝振りを行うなどして生産量確保を目指す。なお、障害が生じた枝の場合、途中で生育不良となる場合もあるので、せん定時にはできるだけ障害の少ない枝を残すよう努める。
- ②有核生産のための樹体量が確保できない場合は、無核生産に切り替えてせん定を進める。
 なお、有核から無核栽培へと切り替えた際は、樹勢が伴わない場合もあるが、施肥の調整や強めの芽欠き、適正着房に心がけ、樹勢強化に努める。

イ 平行整枝短梢せん定樹

- ①主枝が基部もしくは途中で損傷し切除せざるを得ない場合は、損傷量に応じて、主枝を再養成していくか苗木を新植した方が良いか、現場で判断し指導する。
- ②主枝を切除し棚面に空間ができた場合は、残った健全な結果母枝をその空間に持ってきて、生産量を確保しても良い。この場合、なるべく平行整枝を維持するように配置すると、新梢管理が行いやすい（図4）。なお、大きな空間があった場合は、やむを得ず一部分だけ自然系整枝として生産量を確保しても良いが、その場合は夏場の新梢管理を早め早めに行い、再養成する主枝に悪影響が及ばないようにする（図5）。



3 棚の倒壊防止のための対策（今後）

- (1) あらせん定を行っていない場合は早めに実施し、棚面への着雪・積雪量を減らす。
- (2) 降雪量が多く棚倒壊の恐れがある場合は、図6、7を参考に、棚面から雪を降ろす。

